様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３３３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０６４１０

研究課題名（和文）加賀藩関係の霊廟建築に関する研究

研究課題名（英文）Study on mausoleum architecture of the Kaga-han

研究代表者
山崎　幹泰（Yamazaki, Mikihiro）

金沢工業大学・環境・建築学部・教授

研究者番号：１０３２９０８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：加賀藩に関係する御霊屋を対象として、遺構の調査を行って図面を作成し、関連資料の収集、分析と合せて、建築年代や建築経緯、建築の特徴について明らかにした。一般的には18世紀初頭を境に御霊屋の建設は下火になるとされているが、加賀藩ではその後も建設が続けられたことから、数多くの御霊屋が現在まで残った。その平面形式や規模は多様であるが、ごく初期を除いて位牌堂の形式をとった。主要な建物から回廊で結ばれ、内部で礼拝するための施設であり、外観意匠は乏しい。内部装飾は障壁画や天井画が中心で、旧天徳院御霊堂は彫刻が充実しているが、全体的に控えめな装飾にとどまっている。

研究成果の概要（英文）：I studied on mausoleum architecture related to the Kaga-han, performed the actual survey into remains of the architecture and made drawings, analyzed it with the collection of documents of those architecture, and clarified it about those architecture generations and history, characteristics. Generally, the mausoleum architecture decreases from the early 18th century, however, they were built afterwards in the Kaga-han, therefore many mausoleums survived until today. These layout and size were various, every mausoleums except the first building was the ihai-do style. There was a corridor from the main architecture to the mausoleum. Because to worship in the mausoleum inside, the appearance design was poor. The internal decoration has many a fresco and ceiling pictures, however, it is decorated modest generally.

研究分野：日本建築史

キーワード：霊廟　御霊屋　近世社寺　大名家墓所

１．研究開始当初の背景
日光東照宮を始めとする霊廟建築は近世を代表する宗教建築である。その背景には、実在した将軍や藩祖を神格化することで、統治者に権威を付与する目的があったとされ、装飾豊かで高度な技術を尽くした霊廟建築が各地で建設された。加賀藩においても、御霊屋（おたまや）と呼ばれる霊廟建築が建てられた。しかし明治になり、菩提寺を支援する武家の財力が失われたこと、葬礼のあり方が変化したことなどにより、前田家の菩提寺・天徳院の御霊屋を始めとする一部の建物が失われたと見られる。現在残っている御霊屋も、私的な信仰の場としての性格から公開されることは少なく、その実態は明らかでない。
２．研究の目的
さて、これら加賀藩の御霊屋を研究の対象とする、本研究の目的は主に以下の３点である。
1.御霊屋建築の実測調査を実施し、実測図および復原図を作成する。
2.御霊屋の図面・文書史料を収集、分析する。
3. 実測調査と史料調査に基づき、加賀藩関係の御霊屋の特徴を明らかにする。
３．研究の方法
本研究の対象は、石川県内外に所在する建築群である。まずは、これらの実測調査を行い、実測図面を作成する。一方、周辺資料の収集として、主に図面資料を収集する。比較対象である東照宮系の霊廟建築については多くの研究の蓄積があり、前田家墓所に関しても金沢市が作成した報告書などがあり、こうした先行研究を踏まえて比較分析を行う。
４．研究成果
(1)建築の実測調査を行い、図面を作成した。調査対象の建物の概要は以下の通りである。

［名称］芳春院霊屋（北堂・南堂）
［所在地］京都府京都市北区紫野大徳寺町 55
［建築年代］17 世紀前期
芳春院は、京都・大徳寺山内の北辺にある塔頭寺院。慶長 13 年（1608）に、前田利長・利常が母芳春院のために、玉室宗珀を開祖として創建した。霊屋は慶長 19 年（1614）に没した瑞龍院(利長)の北堂と元和３年(1617)に没した芳春院の南堂があり、内部に安置する石造五輪塔とともに、各没年月に接近した時期に建立されたと考えられる。
北堂は、桁行一間、梁間一間、丸柱、組物三斗、二軒半繁垂木、入母屋造平入り、妻虹梁大瓶束、正面軒唐破風付き、銅板葺き、四周に縁を回す。木階なし。内部は中央後方に石造五輪塔、その向かって左手に木製塔婆。五輪塔は瑞龍院、塔婆は微妙院を祀る。身舎柱は上部粽付きの丸柱。足元長押、地覆、内法長押、頭貫、台輪。組物は三斗、中備は背面のみ間斗束（内外とも）。正面の内法長押は柱周りのみ。正面軒桁は虹梁形とし、蟇股を乗せる。軒廻りは二軒半繁垂木、軒唐破風付き。屋根は入母屋造平入り、銅板葺き。外壁は縦板張り。妻虹梁大瓶束。正面脇羽目、正面除く内法長押と台輪の間、背面を除く組物間に透彫彫刻。縁、足元長押、地覆および軒付けより上を除く部材に彩色を施す。縁は切目縁、内部床は拭板張り。縁には刎高欄を設ける。天井は正面組物から背面組物に格縁を渡し、内側に天女を描く。格縁は井の字型でなくはしご形。柱間装置は正面中央間に観音開き、彫刻付の桟唐戸、台輪上に牡丹唐草の透彫彫刻。左右上に框、左右に方立、脇羽目板に菊花の彫刻。ほか三面は板壁で、軸部、壁とも彩色を施す。小さな建物であるが、屋根が大きく、建物全体に彫刻、彩色が施されており、存在感がある。
南堂も同じく、桁行一間、梁間一間、丸柱、組物三斗、二軒半繁垂木、入母屋造平入り、妻虹梁大瓶束、正面軒唐破風付き、銅板葺き、四周に縁を回す。木階なし。内部は中央後方に石造五輪塔。五輪塔は芳春院を祀る。身舎柱は上部粽付きの丸柱で北堂に比べ、やや粽の曲線がきつい。軸部の構成、組物も同じで、中備が背面のみ間斗束であるのも同じだが内側には間斗束が見られない。正面の内法長押は柱周りのみ。正面軒桁は虹梁形とせず、蟇股を乗せる。軒廻り、屋根も同じ。外壁は横板張り。北堂と異なり、建物全体を覆う彩色はなく、頭貫木鼻、台輪、組物木口、蟇股、垂木木口などに白い木口塗りが確認されるのみ。天井は、正面組物から背面組物、および両側面の組物に格縁を渡して井の字型とし、内側を鏡天井とする。柱間装置は、正面中央間に観音開きの桟唐戸、上部に盲連子。左右上に框、左右に方立、脇羽目板。ほか三面は板壁で、一面に間柱を二本、筋違を一組、それぞれ入れる。平面規模、軸部、屋根などは北堂と共通するが、装飾は欄間彫刻のみで素木でまとめられており、対照的である。床板及び屋根材の多くは、戦後の火災により取り替えられた新材である。

［名称］実性院御霊堂
［所在地］石川県加賀市大聖寺下屋敷町 29 番地乙
［建築年代］江戸前期（本堂と同時期に改築）
実性院は、大聖寺山ノ下寺院群の一郭に位置する曹洞宗寺院で、大聖寺歴代藩主の菩提寺として知られる。
御霊堂は正面三間、側面三間半、寄棟造桟瓦葺きの建物で、本堂の西側に位置する。本堂上奥の間と L 字型の畳廊下で結ばれている。棟札は現在確認できないが、御霊堂の建築年代は後に考察する通り、寛文５年（1665）の本堂より遡る、江戸前期の建物と見られる。平面は間口三間の前後二室で、後室を上段の間とし、前室が奥行二間、後室が奥行一間半で奥行半間の位牌壇を設ける。
前室の中央正面に出入口を設け、敷鴨居を付けるが、現在は戸がなく開放されている。壁面は正面と左手は漆喰壁とし、正側面三方に内法長押を打つ。左手後室寄りの一間のみ、扉状の襖とする。右手壁面は、低い腰壁と中

敷居、板戸二枚引違と障子一枚を入れる。小壁は漆喰壁。両側面壁と正面壁から二十センチほどを板敷とする。天井は竿縁天井。
前室後室境は円柱を二本建て、上段框、無目鴨居、吹き寄せ格子欄間、天井縁とする。
後室は、背面を通しの位牌壇とし、框の下を三間に分けてそれぞれ地袋とし、引違の襖に障壁画を施す。框は柱筋より手前に設ける。位牌壇は五段。柱筋に通しで虹梁を架ける。左手壁面は、地袋、框の上に、位牌壇を四段。柱筋に正面より低い位置に虹梁を架け、その上の小壁を障壁画とする。柱筋に窓台、長押跡があり、当初は右手壁面と同様の窓があったと知られる。虹梁上の障壁画はほかと比べるとやや稚拙で、後補と見られるが、地袋の障壁画は正面のものと遜色なく、後補とは考えにくい。前室と同じく、両脇を二十センチほどの板敷とする。右手壁面は、低い壁に障壁画を施し、位牌壇の框高さのやや上に窓台を設け、横長の引違窓とする。長押は前室から通しで設けるが、前室後室境で継いでいる。長押は位牌壇框の柱まで。小壁は障壁画。天井は格天井とし、もとは格間ごとに花鳥画が施されていた。軒は一軒疎垂木、赤色の桟瓦葺きで、棟は石棟。軒付けの痕跡から、当初はこけら葺であった。外壁は下見板張り。
さて、前室後室とも左右に板間部分があるが、これは京間寸法（一間六尺五寸の畳割り）の建物に、加賀間寸法（一間六尺の畳割り）の畳を敷いていることによるもので、後室正面の板間も、後室位牌壇の框が柱筋より手前に設けられているのも、そのためである。前室の畳の下は拭板敷で、当初は板間であった可能性もある。本堂からの通路部分も京間寸法で計画されており、一方で本堂は加賀間で計画されている。加賀地方での京間寸法の使用は、江戸時代のごく初期に限られると考えられており、御霊堂は本堂より年代が遡る建物の転用である可能性が高い。前室後室境に二本の円柱をたて、背面を通しの位牌壇とするのは本堂の大間・内陣の造りとも共通することから、実性院前身の宗英寺時代の本堂の一部である可能性も考えられる。

［名称］妙成寺書院
［所在地］石川県羽咋市滝谷町ヨ１
［建築年代］万治２年（1659）
書院は加賀藩五代藩主前田綱紀が、三代利常の遺志により、利家および利常の生母寿福院と息女浩妙院の冥福を祈って御霊屋を営み、あわせて参詣の休息所にあてるために建立したと伝えられ、万治２年（1659）利常逝去の翌年に竣工した。詳細は『国宝妙成寺書院及鎮守堂修理工事報告書』（妙成寺書院及鎮守堂修理事務所編、1938 年）にまとめられている。

［名称］旧天徳院御霊堂（佐奇神社拝殿）
［所在地］石川県金沢市佐奇森町ホ 113
［建築年代］寛政元年（1789）
佐奇神社拝殿は、金沢市小立野の天徳院に寛政元年（1789）に建てられた天徳院御霊堂で、明治初年に解体され売却、明治９年（1876）に金沢市佐奇森町の同神社に移築され、現在は神社拝殿として使用されている建物である。佐奇神社は金沢市の北西に位置する旧郷社である。拝殿は桁行五間、梁間五間。屋根は入母屋造、平入り、桟瓦葺きで、正面に一間の向拝を付ける。向拝では、面取角柱をたて、水引虹梁をいれて根肘木で受ける。組物は出三斗（連三斗）、木鼻は竜頭で、中備の代わりに龍の胴体と雲の彫刻をあしらう。
身舎柱は円柱、側柱・向拝柱は角柱几帳面取りで、外周は切目長押・腰長押・内法長押をうち、頭貫・台輪を通す。組物は、正面外側では、台輪上に出三斗、中備に蟇股を据え、実肘木で軒桁を支える。出三斗の手先と垂木の間に菊の篭彫彫刻を入れ、方形の肘木で受ける。側背面外側は、出三斗の代わりに拳鼻付き平三斗を据え、篭彫彫刻は入れない。頭貫端部は四隅とも木鼻とする。正面中央三間は双折戸（菱格子窓付き桟唐戸）。両脇一間は窓で引違い板戸、腰壁および小壁は表裏とも地紋彫りを施した板壁とする。
内部は、三間四方の身舎の四周に庇を回す。身舎の後方一間および背面側庇を上段とし、幣殿の床高と同高とする。正面に落縁と木階五級を設ける。床は拭板敷き。身舎柱筋はすべて柱間を開放し、小壁は庇側に地紋彫りを施し、内側は無地の白色塗装とする。正側面三方の中央間の小壁のみ、花狭間に花鳥をあしらった彫刻を施す。天井は折上格天井で、格縁は黒漆塗りで面のみ朱に塗る。側柱筋では、東西側面腰壁の内側に、五間とも地紋彫りの板壁。背面は中央三間を開放し、両脇一間の腰壁は内側に地紋彫りの板壁。天井は化粧屋根裏。軒は二軒本繁垂木。妻飾は二重虹梁蟇股とする。
建物の特徴は内部装飾にあり、立体的な彫刻装飾が随所に見られ、特に腰壁や内法長押上の小壁に施された地紋彫りは、虹梁周りの彫刻とともに、側周りの空間に華やかさを生み出している。一方、彩色はほとんどない。
棟札が保管されており、「天徳禅院霊堂」という建築名、「故参議徳翁一斎大居士」の「尊牌」、すなわち加賀藩主五代・前田綱紀の位牌を祀ることが記されている。寛政元年（1789）上棟、棟梁は、御大工頭・清水次左衛門藤原峯充、清水多四郎藤原軋充。清水峯充は、安永７年（1778）３月に御大工頭に任命、文化５年（1808）10 月に亡くなるまで約 30 年、加賀藩 35 人の御大工頭の中で最も長期にわたり御大工頭を務めた人物である。在職中、加賀藩の重要な作事に数多く携わり、その業績には気多神社本殿（羽咋市・天明 7 年（1787）・重文）、金沢城石川門続櫓（金沢市・天明８年（1788）・重文）などがある。
また、『加賀藩史料』によると、天明８年（1788）２月に10代藩主前田治脩が天徳院における霊堂建設の経費節減を命じている。

金沢市立玉川図書館近世史料館には、同建物の設計図と見られる「天徳院御霊堂絵図」が保管されている。図面は 3 点あり、平絵図（桁行立断面図）および妻絵図（梁間立断面図）が各 2 案描かれている。建物の規模、屋根形状は現存する建物とほぼ一致し、彫刻のごく一部について二案で差異がある。図面には「天明八年（歳）御造営天徳院御霊堂」と記されている。
史料と痕跡に基づく建築当初の仕様は、以下の通り。正面五間側面五間、入母屋造平入り、こけら葺、一間向拝付き。三間四方の身舎の四周に庇を回す。庇は板敷、上敷きを敷き詰める。身舎の床は庇より一段高く、畳敷きで、背面側半間通りを板敷として、須弥壇（位牌壇）を据える。内陣は折上格天井で、格間にはすべて紙が貼られ、花鳥画が描かれていた。身舎正面、側面とも中央間に両折戸、両脇間に引違戸、背面は三間とも板壁。側周りは、正面中央間に両折戸、左右二間とも地紋彫りの腰壁と引違窓。側背面は各柱間とも板戸二枚、明障子一枚の引違窓で腰板を下見板とする。ただし、南面の正面から第一間のみ引違戸として、本堂からの御廊下が接続する。正面に半間幅の切目縁と一間向拝が付く 。

［名称］勝興寺御霊屋
［所在地］富山県高岡市伏木古国府 17-1
［建築年代］文化 7 年（1810）
勝興寺住持から還俗し、第十一代藩主となった前田治脩の霊を祀る祀堂で、内陣仏壇の阿弥陀如来立像の手前に治脩と次代藩主前田斉広の二本の位牌を安置する。文化 7 年（1810）1 月 9 日に金沢で没した治脩の菩提のため、藩が位牌二本をつくり、一本を勝興寺に立てることにしたため、勝興寺で位牌堂を建て、同年 7 月 3 日に位牌を安置した。詳細は『越中勝興寺伽藍』（高岡市教育委員会、1994 年）にまとめられている。

［名称］大乗寺御霊堂
［所在地］石川県金沢市長坂ル 10
［建築年代］19 世紀前半（文政～弘化頃）
大乗寺は石川県金沢市の南、野田山丘陵に所在する曹洞宗の寺院である。弘長 3 年（1263）富樫家尚が加賀押野庄野々市（現在の野々市市）に澄海阿闍梨を招聘し創立した。戦国時代に衰退したが、天正末年頃第十四世虎室春策の時代に、加賀前田家の臣、加藤重廉が金沢木ノ新保（現在の金沢駅付近）に大乗護国禅寺を移転復興した。寛永年間（1624～43）に加賀の藩老本多政敏（房州）が檀越となって本多家の菩提寺となり、元禄 8 年（1695）本多家を通じて、藩より寺地を賜り、元禄 10 年（1697）現在地に移転した。
御霊堂は、加賀藩家老・本多家歴代の位牌を祀る御霊屋で、法堂の背後に位置し、幅一間半の廊下で接続する。建築年代は、後述の通り、江戸後期の 19 世紀前半、文政～弘化頃と考えられる。
御霊堂は、梁間三間半、桁行五間半、入母屋造、平入り、桟瓦葺き。北を正面とし、正面に朱漆塗の両折桟唐戸を設け、その左右柱間は明り障子を建込んだ窓とする。堂内の後方と両側面には位牌壇を設ける。軸組は柱を一間ごとに立てるが、内部壁面は紙張りとして柱を隠し、大壁面としている。そのため、位牌壇の背面全体には白い壁のみが見える。ただし、位牌壇下の地袋に、金砂子をあしらったふすま紙が保管されていた。朱漆塗りの両折桟唐戸の彫刻と、内法長押の鶴の釘隠しを除けば、装飾性の少ない簡素な造りであるが、こうした壁紙を用いることで、御霊屋としての荘厳性を演出していたものと考えられる。外壁は、腰長押より下が竪羽目板張りで相決り打ち。上は漆喰壁で、柱には舟肘木がのる。補強材も多数付加されており、内観以上に装飾が乏しい外観となっている。
建築年代については、「安政三年九月真龍院様大乗寺江御立寄之節御縮絵図」に現在と同位置に同規模の「御霊堂」と記された建物が描かれていることから、少なくとも安政 3 年（1856）までは遡ると見られる。一方、「加州大乗寺惣絵図」という、文政 3 年（1820）以前の境内を描いた版画があり、現在の御霊堂に当たる位置に「護法殿」という名の入母屋造平入りの建物があり、これとは別に「酬徳殿」の後方に「霊堂」と記されたやや小さい入母屋造の建物が描かれている。以上により、19 世紀前半の文政～弘化頃に再建されたと考えられる。

［名称］松山寺開山堂・御霊屋
［所在地］石川県金沢市兼六町 5-6
［建築年代］大正 2 年（1913）
松山寺は、慶長 4 年（1599）、横山山城守長知が、現在地に寺地を拝領して建立したのを開創とする。創建当初の本堂は、宝暦 9 年（1759）の大火で焼失。現在の本堂は、天明 8 年（1788）、横山家九世隆従が八世隆達の十三回忌法要にあたり再建した。
開山堂は、大正 2 年（1913）、横山家第十三世横山隆平、叔父の横山隆興の寄付により建てたもので、開山融山和尚の霊牌を安置する。開山堂の両翼にある御霊屋は、正面向かって左側は第十四世横山隆俊が二世長知を始め、歴代の祖を祀るために、開山堂と同時に建立したもので、右側は第十二世の三男の長男・章が父・隆興を祀るために建立した。
開山堂は、本堂の背後に接続する建物で、その左右に御霊屋を設ける。木造平屋、開山堂部分は寄棟造妻入りで、その上から寄棟造平入りの屋根を左右の御霊屋に掛ける。
建築年代は、棟札より大正 2（1913）年の再建であることが確認できる。『加能宝鑑』に描かれた明治 30 年頃の松山寺の境内には、本堂の背後に入母屋造妻入りの建物が本堂と接続されている様子が描かれており、「横山家位牌堂」と記されている。明治期にも御霊屋に相当する建物があったが、横山家は明

治期に尾小屋鉱山の経営で栄えたことから、御霊屋を拡張するために再建したものと思われる。
左右の御霊屋は、ともに控え室と御霊室の二室からなる。共通する点は、控え室に御霊室に向かって床の間を構える点、御霊室の床高を一段高くし漆塗りの框を入れる点、控え室が竿縁天井で御霊室が格天井である点などであり、異なる点は壁の色（左が青、右が深緑色）、位牌壇の規模と虹梁、壺型の明り採りの有無である。左側の御霊室は、二面の壁面一杯に位牌を並べるため、位牌の前に柱が立たないよう、間口一杯に鴨居を渡すのに対し、右側の御霊室は背後の壁面中央をくぼませて位牌壇とし、鴨居の奥に金箔を施した透彫彫刻の虹梁を渡す。彫刻は天女を描いたもので、虹梁および持送を一体とし、その全面に彫刻を施したもので、大変華やかで手の込んだものである。

(2)現存しない建物について

［名称］天徳院
［所在地］石川県金沢市小立野４丁目４−４
天徳院における御霊屋については、『加賀藩史料』の元禄 6 年（1693）8 月 25 日　天徳院上梁式の項に「故羽林君天良大居士霊堂上梁」、元禄 7 年（1694）4 月 3 日　前田光高五十回忌の項に、「高徳公、天徳公御霊堂の並に、同様に改造せらるべしとして」「霊堂の三並の門」「三霊堂の隔の玉垣」などの記述がある。五代綱紀が、藩祖前田利家（高徳公）・天徳院（三代利常室・徳川秀忠娘）の御霊堂と並んで四代光高の御霊屋を、元禄 6〜7 年にかけて整備したと見られる。その建物は「霊堂内天井は、金のがう天井に色絵の一房花、黒漆の縁、金滅金の金具」とあることから、黒漆や金箔、極彩色で装飾された霊廟建築であったらしい。しかしこれらは、明和 5 年（1768）2 月 1 日、火災により焼失。その後、最初に再建された御霊屋が寛政元年（1789）上棟の御霊堂で五代綱紀を祀る。続いて文政 2 年（1819）には、四代光高を祀る陽広院霊堂（聖陽殿）を再営上梁した、とする棟札写しなどが史料として残されている。さらに、天徳院の御霊屋が幕末までに再建されたと伝えられるが、詳細は不明。

［名称］宝円寺
［所在地］石川県金沢市宝町６−１４
護国山宝円寺は、兼六園の南東に位置する、曹洞宗の寺院である。天正 9(1581)年、加賀藩初代・前田利家が七尾小丸山城主になる際、越前・府中の僧・大透圭徐を招いて七尾宝円寺を創建した。天正 11(1583)年、利家が金沢入りするにあたり、改めて金沢に招き、今の兼六園の東隅に宝円寺を創建した。藩政時代を通じて藩主・前田家の菩提寺であった。元和 6(1620)年、現在地を与えられて移転。当初、境内は兼六園側を正面として山門を設けていたが、寛文 9(1669)年、前田綱紀が堂宇を再建する際に、現在の境内の向きに改めたとされる。その後、宝暦 9(1759)年 4 月 10 日、および明治元(1868)年 2 月 28 日の両度、火災により伽藍を全焼した。「宝円寺絵図」（金沢市立玉川図書館近世史料館）などから、幕末の宝円寺には本堂の背後に御霊屋があったことが、確認できる。左右三室と位牌壇の四周に縁側を回し、本堂背後から廊下で結ばれていたと見られる。明治元年に焼失したものと思われ、本堂と共に再建された開山堂に位牌が祀られている。

(3)御霊屋の分類について
関根達人「権力の象徴としての大名墓」（坂詰秀一・松原典明編『季刊考古学・別冊 20 近世大名墓の世界』雄山閣、2013 年）によると、近世大名家の多くは、江戸と国元、また高野山など複数の墓所を有した。それらは、遺体が埋葬されている「本葬墓」と、遺体を伴わない詣り墓としての「分葬墓」、また転封に伴う「改葬墓」に分けられる。大名墓の地上施設としては、霊屋（鞘堂）、拝殿（拝所）、門、墓標・位牌（神主・しんしゅ）・基壇、墳丘、堀、玉垣・板塀・築地・石柵、敷磚、灯籠、花瓶、手水鉢（水盤）、香炉（香台）、墓碑・顕彰碑・神道碑などがある。このうち、霊屋、拝殿などの木造建造物を「霊廟建築」と呼ぶ。
大名墓の上部構造の類型は諸説あるが、以下の通り分類される。
1 類：埋葬施設上に霊屋が建つもので、内部に墓標を納めるａ類と、木像を納めたｂ類(影殿・御影堂)、位牌（神主）を納めた c 類に細分できる。
2 類：埋葬施設上の霊屋とは別に拝殿を有するもの。
3 類：埋葬施設上に墳丘を構築し、手前に礼拝施設（遙拝所）を有するもの。
4 類：埋葬施設上に基壇を構築し、その上に墓標を設置するが、鞘堂は設けないもの。
加賀藩前田家の墓所は金沢市東南部の野田山に設けられ、特徴的な有段方墳形式で、上記分類の 3 類に属する。ただし、墳丘の手前に礼拝施設としての木造建築はなく、位牌を納めた 1-c 類に相当する建築が菩提寺に建てられており、当地ではこれを「御霊屋（おたまや・みたまや）」と称している。
内部に位牌を納めた 1-c 類は、近世大名墓に神・儒葬が取り入れられた十七世紀中葉に成立したと考えられる。十七世紀代には大名の法名の院号や道号を冠した寺院や霊廟が数多く建てられた。しかし、寛永 8 年（1631）の「新寺建立禁止令」や元禄元年（1688）の「寺院古跡新地之定書」など寺請制度確立の過程で行われた新寺建立制限や、財政悪化を理由とする八代将軍吉宗による霊廟造営停止により、十八世紀初頭を境に塔頭寺院や霊屋の建立は全国的に下火となった。
『国宝・重要文化財大全 11　建造物（上）』

（1998）によると、国宝・重要文化財に指定された木造の霊廟・霊屋は全国で 22 棟、建築年代別の棟数は16世紀2棟、17世紀17棟、18 世紀 2 棟、19 世紀 1 棟であり、17 世紀に集中し、18 世紀以降の遺構が極端に少ないことが分かる。平面形式は、孔子廟である多久聖廟を除くとほぼ正方形平面で、輪王寺大猷院霊廟本殿の五間四方が最大規模である。内部は一室のものが多いが、高台寺霊屋、真田信之霊屋宝殿のように前後二室に分けるものもある。また、背面の壁に沿って須弥壇ないしは祭壇（棚）を設けて、位牌を祀る。また、建物の内外を立体的な彫刻や黒漆、極彩色、金箔などで荘厳に装飾することは、霊廟建築の共通する特徴である。

(4)加賀藩関係の御霊屋の特徴について

1.建築年代について

17 世紀の建物として、芳春院霊屋、実性院御霊堂、妙成寺書院、18 世紀の建物として旧天徳院御霊堂、19 世紀の建物として勝興寺御霊屋、大乗寺御霊堂、20 世紀の建物として松山寺御霊屋があり、藩政期を通じて継続的に建てられてきた。八代将軍吉宗による霊廟造営停止以後も建設が続けられたことが分かる。

2.御霊屋の機能について

今回の調査対象においては、内部に墓標を納めるものは芳春院霊屋二棟のみで、他はいずれも位牌を納めるものであった。内部に位牌を納めた形式が 17 世紀中葉に成立したとする説とも合致する。一方、福井藩主・松平家の現存する御霊屋である松平秀康霊屋（西藤島観音堂・安政 3 年（1856））、松平斎承霊屋（大安寺観音堂・天保 7 年（1836））、松平斎善霊屋（称名寺観音堂・天保 10 年（1839））は、いずれも墓標を納める形式であり、対照的である。

3.平面形式および動線について

寿福院霊屋である妙成寺書院は、二段三室の方丈形式で中央奥の間を御霊屋とするが、ほかは独立した建物である。規模は方一間の芳春院霊屋が最小で、内部で礼拝する機能はないと考えられる。実性院御霊堂、松山寺御霊屋は前後二室形式、旧天徳院御霊堂、勝興寺御霊屋は身舎・庇・縁側からなる仏堂形式。妙成寺書院の霊屋部分は八畳間で、書院座敷部分は、藩主の休息所と伝えられている。規模は、旧天徳院御霊堂の五間四方が最大である。また、芳春院霊屋をのぞき、御霊屋は寺院本堂、書院などの主要建物から回廊で結ばれている。旧天徳院御霊堂も、移築前に回廊が取り付いていた痕跡が確認できる。積雪時、雨天時でも礼拝に影響がないようにするためで、御霊屋を外部から見る機会が少ないことから、外観の意匠が乏しいものになったとも考えられる。一方、芳春院霊屋は彫刻や彩色などで外観意匠を華やかなものとしている。

4.位牌壇の形式

位牌を納める御霊屋では、複数の位牌が並べられるよう、背後の壁面一杯に数段の位牌壇を設けることが共通しており、さらに側面にも位牌壇を設けているのが、実性院御霊堂、大乗寺御霊堂、松山寺御霊屋である。ただし、旧天徳院御霊堂は異なり、柱の痕跡から須弥壇を来迎壁前に備えていたと考えられる。位牌壇の背後には、金箔や金砂子を用いた壁紙を用い、周囲を障壁画、彫刻、漆塗りなどで飾り立てる。ただし、東照宮系の霊廟建築のような極彩色の塗装や、装飾的な金具の使用は見られない。芳春院霊屋（北堂）の天井には天女が描かれている。なお、元禄年間に天徳院に建てられた四代光高の御霊屋は、その記述から東照宮系の装飾が施されていたものとみられる。

すなわち、一般的には 18 世紀初頭を境に御霊屋の建設は下火になるとされているが、加賀藩ではその後も建設が続けられたことから、数多くの御霊屋が現在まで残ることとなった。その平面形式や規模は多様であるが、ごく初期を除いて位牌堂の形式をとった。主要な建物から回廊で結ばれ、内部で礼拝するための施設であり、外観意匠は乏しい。内部装飾は障壁画や天井画が中心で、旧天徳院御霊堂は彫刻が充実しているが、全体的に控えめな装飾にとどまっている。過度な権威付けの傾向はなく、あくまで慰霊の空間であった。これらが、加賀藩関係の御霊屋建築の特徴といえよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　3 件）

① 山崎幹泰、大乗寺御霊堂について、日本建築学会学術講演梗概集、査読無、1 巻、2017、87-88
② 山崎幹泰、旧天徳院御霊堂（佐奇神社拝殿）の復原考察、日本建築学会学術講演梗概集、査読無、1 巻、2016、585-586
③ 山崎幹泰、佐奇神社拝殿（旧天徳院御霊堂）について、日本建築学会学術講演梗概集、査読無、1 巻、2015、295-296

〔学会発表〕（計　3 件）

① 山崎幹泰、大乗寺御霊堂について、日本建築学会、2017 年
② 山崎幹泰、旧天徳院御霊堂（佐奇神社拝殿）の復原考察、日本建築学会、2016 年
③ 山崎幹泰、佐奇神社拝殿（旧天徳院御霊堂）について、日本建築学会、2015 年

６．研究組織

(1)研究代表者

山崎　幹泰（YAMAZAKI, Mikihiro）
金沢工業大学・環境・建築学部・教授
研究者番号：10329089